に存候由申聞候、異國人漁師を撫卹する事、船中の人を取扱ふと同樣にて、少しも隔心なき故、此節に相成候ては、漁師共申候は、異國人は至て深切なるもの故、吾々沖合にて風雨にあひ難儀の節は、彼船にて相凌き、炎天の節は冷水をあたへ、病氣の節は藥をあたへ、大に力を得候事多く、吾等の力に及ひ兼候鯨魚を捕るのみにて、漁獵の妨に少しも不相成候を、何故に公儀にては異國人を讎敵の如く御扱ひ被成候やなと、申候者も有之由、新兵衛申聞嘆息仕候、（甲子夜話、視聽草、）

通航一覽卷之二百五十五　終

通航一覽卷之二百五十六

諳厄利亞國部五

○狼藉始末　肥前國長崎

（按するに、今度狼藉に及ひし基本を察するに、蘭人に意趣ありての所爲にして、日本に對せし事にあらず、猶逐條に就て知るへし、）

文化五戊辰年八月十五日朝、白帆船一艘みゆるよし、所々遠見番より注進あるにより、長崎奉行手附二人、通事及ひ蘭人出船して旗合せしに、かれ僞りて蘭人の旗を合せ、端船にて走りより、蘭人二人を捕へて本船に歸る、檢使以下其よし注進あり、奉行松平圖書頭卽港警固の事等を沙汰し、松平鍋島、肥前守、（肥前國主なり、今年當番、）松平黑田、（筑前國主、）官兵衛の人數には、異船繫留燒伐の用意、及ひ增人數の事等を聞役に達す、

文化五戊辰年八月十五日

一今朝六半時比、白帆注進佐賀遠見番より申出る、此節諸向沖出方引取候時節に付、早速隱密方呼出し出方申付、用意銀御證文橫文字一通相渡し、萬一異船に候はゝ、早々其段注進可致、例之紅毛船に候はゝ、手續例之通取計ひ候樣、吉岡重左衛門（按するに、）

長崎奉行手附出役、申渡、

一右に付、波戸場役（按するに、此書中載する地名、みな長崎近傍にして、松浦郡に屬す、數所にして煩しければ、下遂に注せず、人名また長崎奉行手附及ひ家來、大小通詞、町年寄等を出されば同く注せず、）諸熊作太夫ゟ船用意申渡、

一同斷に付、年番阿蘭陀大通詞中山作三郎呼出し、白帆注進有之間、其段かぴたんゟ可相達旨申渡、尤前例之通旗合檢使差出候間、見屆紅毛人之用意可致段も申渡、

一同斷に付、遠見番呼出し、白帆之注進無之は如何之筋に候哉と相尋候處、當時沖出方引取候に付、小瀨戸之注進無之、右故延引仕候、早速飛船を以樣子相糺可申上旨、依之兒島唯助、吉川次郎平出方申付、御證文用意銀かぴたん書翰相渡、

一同斷に付、盜賊改方田口惣兵衛出方申付、

右遠見番盜賊方とも沖出に付、波戸場役諸熊作太夫ゟ船用意申付る、

一年番町年寄ゟ白帆注進有之間、諸事每々之通相心得可申旨、奠紙に而申遣す、

一野母遠見番所當番原嘉平、今卯中刻、未申に當り二十四五里沖に、阿蘭陀船一艘見出し候段注進申出る、

一佐賀聞役關傳之允、左之通書付差出、

先刻御注進申上候白帆船一艘、香燒沖午未之間、里數凡二十里餘相見え候段、追々深堀役人ともより申越候、此段御屆仕候、以上、

辰八月十五日　松平肥前守內　關傳之允

一白帆注進有之に付、宿老森又左衛門、會所目付河野伴左衛門、其外內用方之者とも、追々用部屋迄罷出、船着之旨正德年間延着之例なと申聞、大慶之由申聞、

一小瀨戸遠見番當番古川德四郎罷出、今午刻未申に當り十七八里沖に、紅毛船白帆相見候段申聞、

一中山作三郎罷出申聞候は、白帆御注進に付、御達之趣卽刻かぴたんゟ申聞候處、館內一同大慶仕候段申上る、

右に付、ウドフの阿蘭陀甲必丹（按するに、出島滯留密に申上候段申聞候間、御人拂御座候樣申聞、依之別間ゟ相越承り候處、乍恐かぴたん申上候は、此節館內一統待詫罷在候本國船、入津之由に而上下大悅仕、市中とても同樣可有之砌、如何敷申分には候得共、本國船咬嚼吧

仕出し方、此節迄後れ候儀は有之間敷、仕出し方例之通に而、此節入津と申譯に候はゝ、洋中難船仕一二の檣等吹折候歟、其儀に候はゝ風筋旁進方も不便に可有之處、船脚入不申船に而、風に向ひ至而疾く、檣等も別條無之哉に相見、萬一他國船に而も候はん歟、何れ右之御備も在之方と奉存候、此段存付次第申上ざるは不忠之至、御内々御役人中迄入御聽度段申出候由申聞る、依之密々御奉行へも申上置、

一福岡（按するに、筑前國主松平右衛門尉が城地なり、）開役花房久七兼々申立置候間、白帆注進有之段、手紙に而申遣す、

一旗合爲檢使、手附菅谷保次郎、上川傳右衛門兩人相越、

但、紅毛入津時節後れに付、出方例より刻限早め罷出、本船ゟ不近寄致旗合、沖出方迎船として罷出候者ともへ、樣子得と相尋、若疑敷儀も於有之は、早速兩御番所ゟ申達、湊内へは立入申間敷、尤阿蘭陀乘船せは檢使之跡に附、先へは出し申間敷と於書院直達、德右衛門出席、尤蘭人密に言上之筋も有之に付、手續等德右衛門より巨細に申談し遣す、

一右旗合檢使差出候に付、大通詞中山作三郎へ先刻申渡置候通、かぴたんゟ申達、例之通旗合阿蘭陀人差出候樣申渡させ、筆者紅毛人ホウセマン、シキンムル兩人差出す、

一波戸場役諸熊作太夫、白木理十郎呼出、檢使船、紅毛船幷警固船等、船々差出候樣、尤引船手當も可致旨申渡、旗合紅毛船は鯨船出し候樣、檢使兩人申立候に付、其通り申渡、

一黄昏頃横文字持參致、沖出候吉岡重左衛門遠に玄關へ罷出、直に木部幸八郎ゟ申上度旨申聞、卽刻承候處、入津は異船に而、夕七ツ時前頃高鉾前に碇を入、御檢使も御出、旗合等も相濟候樣子に而、筆者紅毛本船へ近寄候と、彼方よりも十四五人小船に乘移り、此方より參候兩人之紅毛人を乘移らせ、一人乘申間敷と拒候樣子に見え候、忽ち劒を拔て立向ひ、兩人とも捕押へ、本船へ引入候樣子、いつれの舟とも不相分候段申聞、尤重左衛門儀は、沖にてかぴたん返翰請取之、早速役所ゟ差出し可申手續に付、度々本船ゟ催促致候處、何歟延滯に及ひ不審に存しなから、本船ゟもやひ湊口迄參り候へとも、いかにも無心元相成、もやひを解湊口より走り入樣子致見受候處、右之次第也と申聞、第一番之注進に付、奉行直尋有之候、

但し、紅毛兩人檢使船より進出候と、本船舳の方より長さ四五間、幅二三間も有之青皮船、バッテイラを繰り、碇にて卷おろし、天幕を張左右花子兩人計にて、杓子のことき櫂にて船を早め、紅毛船へ近寄と等しく、船板をはねあけ、下より十五人各短筒を持、火繩を振り劒を帶し躍り出、白刃を取て立向ひ、大音を揚紅毛兩人取押へ、直に彼革船バッテイラへ駈込候に付、檢使船船頭始め、棹子共水中に飛入、近邊漁師、商ひ船迄も一同大騷に呼立、船を出し遁るもあり、又は船より滾ひ落游去もあり、檢使通詞其外役人も、おもひよらさる俄事に而、大に狼狽候うち、異人ともかへり、碇に而本船へ挽寄候處、天幕へ風をうけ舞かことくに引附、舳のかたより鍵へかけ、くる〳〵と元船引入、夫より三十六間の船へ軍器を張、專ら石火矢請之船楯等用意之樣子のよし、右船楯といふは、六尺有餘之帆木綿を、一圍も有之程に卷立、夫をチャン網鐵鎖にて編立候物のよし、銃丸は釘を丸め玉にし、足弓を打候玉の由、其外鐵玉、銅張之玉品々あると、ホウセマン歸館之節申聞候、

一旗合檢使菅谷保次郎、上川傳右衛門より役所迄、紅毛商船に相違無之、旗合も相濟候段屆書差越、

但し、右之箇條者兩人歎候に付除之、

一右異船入津に付、山田吉左衛門、花井常藏兩人、御役所附兩組二十人、玉込鐵砲二十挺、何れも選人召連、戸町西泊兩御番所へ人數差配、船備石火矢御臺場毎配り付、其外備方相圖等爲見屆差遣す、

一右同斷異船渡來に付、湊内御備附之儀、兼々御手配之通、御代官高木作左衛門へ直達有之、舍弟道之助一同稻佐鄕ゟ卽刻出張申渡、

一岩原役所御勘定方之面々、早々出勤有之樣連名奠紙遣候處、卽刻相越、於居間直談一先引取、無程具足用意罷出る、

但し、此節具足着用に而罷出候者も有之候、德右衛門具足をは、家來毛利健助と申者心得に而用

部屋へ持參り、四半其外引合等拵置、高橋忠左衞門は、自分詰所に着用致罷在、御奉行も小具足を固め、其外何れも用心之程相見え申候、

一年番佐賀（按するに、肥前國主松平肥前守城地なり、）開役關傳之允呼出、異船入津紅毛筆者兩人召捕、無上狼藉不法之次第に付、紅毛兩人取戻之上者、正德年間南蠻船燒沈候任例、（按するに、南蠻船燒討の事は、慶長十四年にて、正德年間燒討の事、他に所見なし、）船打碎燒沈可申間、燒草火船其外備方手配致し、手續致書面差出可申候、尤敵船ゟ不洩樣、國許へも增人數早々可申遣旨、於對面所德右衞門案內直達、

一砲術家町年寄藥師寺久左衞門ゟ申付、近年蝦夷地騷動以來、兼而奉行所より異國船爲防、江戶表ゟ申立に相成居候湊內十四ヶ所矢配り付、夫々兩組召連、兼而定め有之候通、町年寄見習も人數頭取異船近寄候はゝ、石火矢打拂候樣申渡、本久四郎兵衞ゟ打渡候書付は、一人別に固め場所人數割之書付也、

一右に付、御武器藏預り三浦藤次郎、永尾龜三郎、其外見習共五人呼出し、藥師寺久左衞門へ石火矢大筒相渡し可申、尤持運ひ地車人足、五箇所宿老會所ゟ入用次第可申達旨、且又御旗、御幕、具足、鎖り帷子、旗竿等取揃、御陣屋へ差出拵置候樣、德右衞門申渡、

一右に付、又左衞門より鹽硝相渡候樣申出候に付、鹽硝藏預り德見元助へ申付、向々久左衞門合對を以、夫々相渡候樣申渡候處、無程合鹽硝渡しきり如何可仕哉と申出候に付、久左衞門ゟ可然取計ひ候樣申渡、夜中石火矢配り附之地車之音、車力之聲山谷ゟ響き雷の如し、

一書記役手附斧生源一郎ゟ申付、奉行に差添罷在申出され候程之儀、如何にも書留置候樣申付候處、樓上座敷向奔走に立勞れ、行屆き不申旨斷候由相止る、右巨細之箇條者、表向引渡日記に省略、

一御役所附觸頭共ゟ、於對面所湊內固場所之儀、中村繼次郎、木部幸八郎申渡、

一人見藤左衞門、松平左七湊內爲見廻相越、

一長崎附十四家之開役一同呼出し、於書院今般異國船渡來非常之儀に付、其段銘々在所表ゟ早使を以申遣、跡船等も見え候はゝ、一左右次第人數差出候樣直達有之、

但、右十四家、

薩摩　開役　上野善兵衞
肥後　同　長尾平太夫
久留米　同　坪池八右衞門
對馬　同　橋邊作右衞門
長門　同　山縣伊八郎
肥前　同　關傳之允
筑前　同　立花善太夫
小倉　同　明石與次兵衞
柳川　同　由布七右衞門
島原　同　鵜殿七郎右衞門
平戶　同　宗像平次右衞門
唐津　同　小林大登
大村　同　松浦鐵十郎
□□　在役　渡邊藤一
七島　開役　大濱典膳

右一同直達、

一福岡佐賀兩家へ者、前段之趣に付增人數之儀、早早國許ゟ可申遣旨、且又、水野和泉守に者在邑に付、樣子次第人數繰出し候樣相達可申旨、其旨別段

に心得居候樣、小林大登へ直達、德右衞門取扱、夫々伺等有之、海陸持場之外多人數集場等差圖有之候、

一後藤惣太郎廣間ゟ相詰る、

一散使町使兩組唐人番一同呼出し、於廣間此節非常之儀何れも出精、夫々手柄有之候樣可致旨直達、

但し、一同平伏、後藤惣太郎御請申上、年行司も罷出る、

一兩家開役呼出し、於對面所申渡候は、此節異船及狼藉、紅毛兩人擒にいたし、其儘出帆候而は不相成候間、差留候手段可致、若又右手段も調はさる內出帆候はゝ、無據次第打沈可申、彼是備方兩家申合、規則被立置候通、守衞之人數配り附、石火矢臺場二の目三の目足並宜しく、適之燒打有之候樣、用意調候はゝ、卽刻出張可致間、調次第可申聞旨、尤先刻相達候燒打手續書面も、未相調不申や、何れ出精可有之旨直達、

一夜六ッ半時比、保次郎、傳右衞門罷歸り、紅毛人兩人奪はれ候始末申立候處、其儘には難相成、早々罷越死力を盡し取戻可申と、嚴敷直對有之候、

但し、右兩人罷歸り役所ゟ罷出候に付、兩人とも

直に德右衞門案內、於居間被致直對候處、菅谷保次郎大息を吻、齒の根も不合體に而、異船バッテイラに乘り移り、思も不寄、船底より十五人短筒を持、白刃を振て紅毛船ゟ飛込、兩人直に召捕、本船ゟ者一瞬之間に引取、其人物各如猛虎勃握自在之働、威風可近附樣も無之相見候へとも、跡を附入及傷にも及へき處、夫に而者鎭臺御心配も多く、却而亂雜致すへくやと、一先此段申上候旨申演候處、奉行貌を改め罵詈して言、其方とも能承り候へ、小祿といへとも各賜ふ所公祿也、西國諸藩之見る所、深く可恥事也、今朝も申聞候通、紅毛は御預り之者大切に相心得、うかと先へは出し申間敷筈、其上、出帆之船に紅毛返翰をも不相尋、等閑之心得たり、右之次第其上及刀傷にも候はゝ、却而可及亂雜哉なと、如何之申分却而忍さる所あり、刀傷にも及ひ候程之次第と、無事に引取との次第、輕重いつれか增ん、卽刻罷越取戻し可申、心配勞苦も此節之事、尋常之勘辨に而は相濟不申、潔く打向ひ死力を盡し取戻し可申、諸事手當德右衞門ゟ申付候間、其段可心得と嚴しく申付る、此兩人歸府後、江戶表御調之上、役儀被召放押込被仰付候、

一奉行德右衞門ゟ被仰聞候は、誠に混亂心付候儀は不及申聞、夫々取計ひ伺事等も大抵可然樣、可致差略旨御達し、

一兩家聞役ゟ、此節多事致混亂候に付、當所用達者とも御陣屋へ相詰、急用相辨し候樣申達、

一町々乙名兩通詞、宿老とも帶刀願に付、貸刀之心得に而、此節限り差免候間、何れも手柄致し候樣申達、其段相詰居候惣太郎へも申渡、右に付年寄共召仕之ものとも、帶刀相願候に付德右衞門承り置、長崎聽記、

文化五年八月十六日或書上

昨十五日卯上刻、深堀遠見番所より白帆一艘見出し候旨、御奉行所ゟ注進有之、夫より所々遠見よりも同樣申出候に付、阿蘭陀船入津之心得を以、例之通爲旗合見屆檢使、御家人菅谷保次郎、上川傳右衞門、通詞、其外出役のものとも、紅毛人兩人召連、午下刻波戶場出船、小瀨戶迄罷越候處、彌阿蘭陀國之旗印に相違無之體に御座候に付、卽刻同所出船、神

の島於沖手、本船ゟ乘付、旣に乘移り候迚端船へ取付候處に、本船より七八人飛下り、孰れも劒を拔持、阿蘭陀人兩人を難なく引伏せ奪取申候故、通詞猪股繁次郎、植村作七郎兩人奪返し可申迚、端船ゟ飛入候折柄、船離れ兩人とも入水仕候由、

但、通詞兩人之事、表通は本文之通屆出候得とも、內實は其體に恐れ、水中ゟ遁込候由之風聞も有之、又は取返し候半迚、異國人に取付候所を、水中ゟ放込れ候共風聞御座候而、孰れを正說とも難相分候得共、水中ゟ落入候に者相違無御座候、

右騷動を見請、檢使兩人驚き恐れ、前後之差別なく、西泊り御番所ゟ逃込申候故、地役人とも我先にと逃退、皆々西泊りに而落合申候、扨水中に落入候通詞共は、漸船に取乘り、沖手ざいのくひと申、肥前御領所ゟ自注、長崎より三里計有之所也、逃行、陸地より戶町御番所迄罷越申候由、自注、其時申の下刻、異國船は高鉾島脇ゟ、自注、長崎より海路凡一里半、碇を入船繫き仕候、

但、阿蘭陀人兩人を奪ひ取候後、直に阿蘭陀國の旗印を取除、エゲレス國旗印に引替申候得とも、未何國之船と申儀相分り不申候、一說魯西亞とも、又はエゲレスとも風聞仕候、

同月十八日同斷

一右船、阿蘭陀旗印等迄も差出、湊口ゟ碇を卸候處に而者、出向之役々にも紅毛船と相心得、諸船異國船ゟ近寄候所に而、俄に端船に十四五人乘組、紅毛人乘居候船ゟ無體に乘込、劒抔拔候而兩人をおどし奪取、猶又湊內へ端船乘入候仕形、不法に相聞候に付而者、奪取候紅毛人差返候上者、燒打にも可被仰付御含に而、十六日晝頃より俄に其御手當有之、長崎大筒役藥師寺久左衞門大波戶ゟ出張、幕張に而御預りの石火矢、其外大筒等船々ゟ乘せ付候手當、又は船中乘せ付之竹束御出來方に付、長崎中之木屋圍置候竹御買上、大工幷輪替不殘大波戶ゟ出張、數多之竹束取拵、湊內に繫居候諸國之商船幷唐船抔者、稻佐幷大浦邊ゟ相移し、湊內に而鐵炮等相放候而も、不差支樣被仰付、唐人屋敷、阿蘭陀屋敷、其外湊內海手又は市中之堅め、町年寄之內へ懸り被仰付、七十七町之乙名町わりに而付添、町々火消之手之者を以相堅め候に付、地役人中者折柄

に付、却而御借刀と申名目に而、俄に帶刀御免、晝夜大勢市中を徘徊いたし、晝は大旗夜は高挑灯、役人之向者火事羽織着用致し候、右之次第に付、誠に長崎中者上を下たと大騷動、尤諸家御藏屋敷も、右に准し夜廻等有之、夜者御門ゟ大丸挑灯を燈し候、尤十五日夜遲方より、圖書頭殿にも海手幷市中御見廻り有之、嚴重之内にも大混雜に而御座候、

同日長崎出或書狀

一旗合之日本船を取卷候端船一艘に、異國人共凡十二三人宛取乘り、三艘に而者五十人餘に而紅毛人を奪取候故、多勢に無勢に而、役々水主なとも支へ見候得共、手に不及、無據相回し、又は海中ゟ飛込候趣に而、甚不覺之事故周章候筋に相見、不手際無申計候、

同日同斷

一八月十五日、大波戸其外海手之固め、早速御觸達有之、暫時之間に御備相調、嚴重之御手當に相成申候、左候而肥前、筑前、大村へ計人數組早々被差遣候樣被仰渡、外に類船無之故、御國々より人數組被差出候に不及旨、諸家之御附人ゟ被仰渡候、

一陸手海手とも、其外諸所ゟは、高張挑灯、篝火夥敷、二里計か間如晝御座候、

一諸家御附人幷地役人、不殘御奉行所門前に相控、尺寸之明地無之、押合候程之事に而、何れも陣羽織野袴、又は火事裝束、或は半てん、打裂羽織着用に而御座候、

同日同斷

一黑船燒打之御含ゆゑ、最初者大村樣に者、湊内御領地之御堅め御手當被成置候樣、唐津樣には長崎御廻りに、不被及段被相達置候得共、其節俄に大村樣に者長崎ゟ被差越、松平肥前守樣御人數ゟ御加勢被成度、唐津には人數組被差出候樣、被相達候由、

同年九月廿一日、阿蘭陀通詞名村多吉郎書狀

八月十五日エゲレス船一艘、長崎表ゟ乘渡候始末、荒方左に申上る、

一八月十五日、辰刻頃白帆相見候趣、肥前鍋島七左衞門殿より御注進有之、同國野母遠見より、白帆一艘見出候御注進、午の刻比に、瀨戸より十七八里に相見え候御注進有之候段、御奉行所より御達有之、

其節旗合檢使として、菅谷保次郎殿、上川傳右衞門殿、阿蘭陀人通詞附添沖ゟ罷越候處、申の下刻比白帆之船者、追々伊王島近く走り寄候に付、四郎ヶ島邊迄、檢使幷阿蘭陀人何れも相越候處、赤白青横縞之旗印朗らかに相見、猶又檢使より被相尋候に付、阿蘭陀人に相尋候處、阿蘭陀旗に相違無之相見候段、阿蘭陀人申之、其後近寄、殊に至而順風に而、白帆之船ゟ難乘附程之儀に有之候處、彼船より俄に端船を漕出し、阿蘭陀人乘候船ゟ漕付、彼端船より罷越候者共ゟ、阿蘭陀人より相尋候は、何國之船に候哉と相尋候處、阿蘭陀船に而咬噌吧出帆之由、阿蘭陀語に而相答候故、去年歸帆之役人阿蘭陀ハクキス者、渡來いたし候哉と相尋候處、乘渡候段申し候に付、無程御檢使一同本船ゟ可罷越趣、阿蘭陀人より相答候處、端船之者共、隱し置候劍を振り上不殘立掛り、阿蘭陀乘組之船へ飛込、理不盡に阿蘭陀人を彼端船ゟ捕へ行、漕出し候と相見候處、本船より端船ゟ繩を附有之候を、本船より挽付候、以上、親聽草、

文化五年八月十六日、大村上總介嫡子に屬するに、風前國大村城主、御屆

口上覺

異國船一艘、昨十五日長崎表ゟ渡來に付、湊領内海固め船之儀、松平圖書頭より、彼地ゟ差置候私家來之者ゟ被達候に付、早速差出候、此段御屆申上候、以上、

八月十六日　大村上總介

右同斷一所に差出す、

口上覺

昨十五日長崎表渡來之異國船、其儘難差置、品に寄打碎き候樣可成候、依之陸地固め差出、且右船神崎ゟ罷出、萬一御番所當番松平肥前守人數不揃にて、出帆候而は不相濟儀故、私人數揃次第、神崎ゟも可差出旨松平圖書頭より、彼地に差置候家來之者ゟも被達候に付、早速陸地固人數船手之固共差出申候、此段御屆申上候、以上、

八月十六日　大村上總介

右者、九月三日早追飛脚至急に付、酉中刻御用番土井大炊頭樣ゟ被仰渡に付、老中列座、笠坊八助持參、御取次落合權平方ゟ相渡候處、御落手、尤赤間關渡り之節、風順惡敷且大井川滿水支に而、延引之段申述置候、

同月十七日松平肥前守御屆

於長崎、一昨十五日白帆船相見、段々乘寄於伊王島、旗合有之、阿蘭陀人幷檢使之者差出候處、旗印も阿蘭陀船に相違無之候に付、例之通出役之檢使、右船わ可乘移と致候處、端船より旗合之阿蘭陀船わ乘移、阿蘭陀人兩人召捕、本船わ連行候に付、檢使之者頻りに可相支と、種々取計有之候得共、案外俄之儀に付、不及差支引取候、依之、在留之阿蘭陀人右體之取計に逢而は、其儘可差置樣無之、外に檢使被差出、右等之譯急度被相糺候積り之由、右に付、當番方より警固船差出可申段、尤和人わ對し手向等仕候儀に者無之候得共、自然不意之儀も可有之哉、其覺悟に而出張仕候樣、旁松平圖書頭より、長崎わ差出置候私家來之者わ、被相達候段申越承知仕候、依之、手當之儀、猶又申付候儀に御座候、此段御屆申上候、以上、

八月十七日　　松平肥前守

右者、八月晦日御用番青山下野守樣わ（拔するに、老中忠裕、）御屆、

同月晦日松平主殿頭（拔するに、肥前國島原の城主、）御屆

去る十五日午刻、紅毛船長崎沖わ相見候に付、爲旗合紅毛人召連、檢使之者差出、小瀨戸沖に而致旗合候處、萬端紅毛人之致方に而、旗も紅毛人之旗を出し、通辯も紅毛口にて候故、いよ〳〵紅毛人と存候而、本船わ乘移へくとて漕寄候處、異船より端船をおろし、此方之船に乘紅毛人兩人召捕へ、右船に連行候體に付、參聞敷と致候得は、異人十四五人劒を振廻しおごし候に付、無是非召捕られ參り候、右に付、檢使之者共引續き可乘移と致し候得共、右端船は早々漕去り、本船は大船故中々容易には乘り移かたく、殊に少人數ゆゑ可致樣も無之、其儘引返し候由、

同年九月四日、松平官兵衛家人御屆（拔するに、江戸にて御屆の日次なり、）

於長崎、先月十五日異國船一艘渡來に付、松平圖書頭樣彼地わ置候家來之者、罷出樣子相伺候之處、圖書頭樣御對面有之、右船例之阿蘭陀入津之沖合にて、地方わ乘付候に付、相旗合に差向候阿蘭陀人より問を懸候處、阿蘭陀語に而相答へ、彼船より端船を差出し、阿蘭陀人二人を召捕本船わ連行候、其儘難差置、當番方幷番船付置、自然出帆之體に候はゝ、繫留候樣、且非番方詰持候御石火矢臺場わ手當可仕旨、被申達候段、黑田甲斐守（拔するに、筑前國秋月の城主、）致承知候、依之手當之人數官兵衛家老黑田源右衛門儀も、早速差越候儀に御座候、右に付、官兵衛代甲斐守申達候段申越候、此段以使者申述候、（以上、戊辰長崎陽記、文化ろに、此他諸家の屆、及び長崎出の書狀等數通あり、大凡同しければ載せず、）

通航一覽卷之二百五十七

諳厄利亞國部六

○狼藉始末（肥前國長崎）

文化五戊辰年八月十五日夜、異人端船三艘にて、港内を乘廻し狼藉に及ふよし注進によて、奉行より要所警衛の事を沙汰し、且其船兩番所に於て逃さす召捕へきむね、肥前筑前の聞役其外に達す、此時在留の蘭人、異人の所爲を怖れて、御朱印を携へ奉行所に來る、

文化五戊辰年八月十五日

一調役人町年寄一同呼出し候處、高島四郎兵衛、高島作兵衛、福田十郎左衛門、久松善兵衛、後藤惣太郎、藥師寺久三郎罷出、於書院直達被致候內、異船パッテイラを以、湊內唐船わ押懸り候段注進有之、其儘座を立、四郎兵衛一人居間迄呼寄直達有之、何れも固め場人數劃書面等、德右衛門より請取候樣被申渡、於用部屋書付相渡、

但し、此時湊內俄に大風號呼之聲、唐船船每煙を